天王寺動物園のメガネグマ 2 頭におけるパーソナリティの研究

岸野　湧樹

【序論】 パーソナリティは「状況や時間経過で変化しないものの見方や考え方、振る舞い方の個体差」と定義されている。ヒト以外の動物を対象としたパーソナリティ研究は、個体の行動からパーソナリティを特定することで、飼育環境の改善や野生に帰す試みの成功率を向上させることに貢献している。様々な動物種においてパーソナリティ研究が行われている中で、クマ科（Ursidae）を対象とした研究は少なく、中でも、メガネグマ（*Tremarctos ornatus*）を対象とした研究は行われていない。そこで、本研究では、
①メガネグマのパーソナリティを行動観察から得たデータと飼育担当者による質問紙評定から調べること
②パーソナリティの重要な要素である状況の変化による一貫性が、各行動で見られるのかを検討すること
③飼育動物の幸せと個体のパーソナリティを検討することの 3 つを目的とした。

【方法】 対象は、大阪市天王寺動物園のメガネグマのダイスケ（オス、30 歳）とプッペ（メス、28 歳）であった。質問紙評定には、先行研究に基づいた 21 のパーソナリティ評定項目を利用し、クマの飼育担当者 2 名に回答を依頼した。行動観察は、1 頭 15 分の個体追跡観察を、1 日につき 10 セッション、合計して 20 セッションの計 5 時間行った。全生起法によって、探索行動や威嚇行動などを記録し、1 時間あたりの生起頻度を算出した。採餌行動などに関しては、1 分ごとの瞬間サンプリング法を、遊びに関しては、ワン・ゼロ法を用いて生起率を算出した。また、状況の変化による各行動の起こりやすさの一貫性を検討するために、(1) 展示施設付近に来園者が何人いたか、(2) 展示エリアのどの場所を利用したか、(3) 給餌場面と関連していたかを記録した。観察期間は、2020 年 9 月 23 日から 11 月 28 日までの 25 日間であり、総観察時間は 121 時間であった。

【結果と考察】 ①先行研究で用いられた方法を参考にして、行動観察によって得た行動項目と質問紙の評定項目が対応する 6 つのパーソナリティを決定することができた（行動項目と評定項目: じっとしている割合の低さと活動的である、採餌行動と食へ関心がある、ステレオ行動と奇妙である、探索行動と好奇心旺盛である、敵対的交渉と他個体に対して攻撃的である、遊びと遊び好きである)。これら 6 つのパーソナリティにおいて、2 頭の対象個体の間で、行動項目の生起率がより高かった個体と、質問紙の評定項目がより高かった個体が一致していた程度を κ 係数として算出した。その結果、κ 係数は、-0.20 であり、行動項目と評定項目の一致度は低いものであった。②本研究では、状況が変化しても行動の起こりやすさが一貫しているパーソナリティがいくつか確認できた。例えば、給餌前後の場面の変化に関わらず、ダイスケの方がプッペよりも敵対的交渉が多かった。この結果は、場面が変化してもダイスケの方が「他個体に対して攻撃的である」というパーソナリティが一貫して表れやすかったことを示している。③飼育メガネグマの幸せには、対象物への執着を示すパーソナリティが関係していると考え、本研究では採食場面における採餌行動を妨害する行動に着目した。その結果、ダイスケのプッペに対する威嚇行動が頻繁に生起し、威嚇によってプッペが餌のある場所から離れる行動も多く記録された。これらの相互交渉から、餌に対する執着を示す「食へ関心がある」というパーソナリティがプッペに比べてダイスケの方がより強く表れたため、プッペの幸せが妨害されることが多かったと解釈できた。観察中に、餌が入った氷のブロックと餌を詰めたボールが同時に展示エリア内へ投入される給餌方法が行われた。その時、ダイスケは氷のブロックへ、プッペは餌の入ったボールへ向かい、採食場面であるにも関わらず、2 頭の間で敵対的交渉は生起しなかった。このことは、同じ給餌方法でも個体によって反応が異なることを示しており、異なる給餌方法を同時に行うことで採食場面での幸せの妨害行動を減少させることができると考えられる。（比較行動学）